

2021年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書

(協力活動) / 調査・研究)

提出日: 2022年7月16日

2022年7月27日 rev1

2022年10月27日 rev2

2022年11月22日 rev3

氏名: 関谷 拓朗

プロジェクト名称: デジタルソリューションと現場活動を通じたモザンビーク教育セクターの改善

実施国: モザンビーク

実施期間: 2021年07月01日～2022年06月30日

1 活動実施内容概要

- ・モザンビーク教育セクターにおける質、量、労働市場との接続を改善することを目的として活動を実施した。
- ・目的を達成するためのデジタルプラットフォーム構築に向けてYoutubeチャンネルとFacebookアカウントを持った。
- ・教室をレンタルし発達障がい児向けの個別セッションの活動を開催した。

2 活動の結果・成果

(具体的に何がどう変わったか、何がどういった状態に変化したかを記述)

首都マプトにおいて発達障がい児向けのサービスが増えた。

途上国においてはまだ珍しい発達障がい児向けの療育支援活動はモザンビークの首都マプトにおいて始めることが出来た。子どもとサイコセラピストが一対一でセッションを行うスタイルの療育事業は今のところ他にない。

3 (申請時に)期待された効果と実際の相違点

異なる場合はその原因と対処内容、及びその対応による結果

想定よりもデジタルサービスを使用している団体が多くなった。丁度コロナ禍の時期と重なっておりオンライン教材を作成する団体が急激に増えたためと思われる。そこで、デジタルサービスの路線は維持しつつ、実績を作るためにも現場での活動により注力した。

事業の継続性を鑑み、ある程度、富裕な層がアクセスしやすい場所での教室をレンタルしたため、予算策定時よりも価格が高い教室をレンタルすることになった。顧客よりアクセスしやすい場所だと好評を得ている。

4 活動成果の持続発展性

利用者や関連機関とのコミュニケーションを深めるにつれて私たちのサービスを求めているご家庭が多く存在することが分かってきている。
まだ赤字ではあるが認知度は高まっている。
さらに認知度を上げるべく、幼稚園や小学校への営業活動や障害の診断を下す病院などへも働きかけている。
また、心理学部の学生をインターンとして採用するなどしてより多くの子どもを受け入れられる体制構築を進めている。

5 苦労した点、反省点、本活動を通じて得られたこと、学んだこと、教訓等

- ・教育事業の多くは補助金や寄付の存在を前提として成立していることを学んだ。
- ・活動当初に活動をしていたChamanculoで授業料の徴収を試みたときは苦労した。所謂貧困層から料金を徴収することのハードルの高さとNGOが存在している業界で民間企業が業務を行うことの困難さを知った。
- ・教育、医療など人権に関する分野はNGOが入って無料でサービスを行っており、特に脆弱な地域では有償でのサービス普及は難しいことが分かった。
- ・まず実績を作ることも大切だが事前の調査も大切だと学んだ。ただ実際にやってみないと実感は持てなかっただろうなと思う。

6 ご自身の今後のプラン、及び本活動の活用予定・計画

- ・新たな顧客の獲得を目指す。
- ・より多くの顧客にサービスを届けるために、寄付を受け取ることが出来る法人を設立予定である。
- ・モザンビークの教育の質、量並びに労働市場との接続を改善するために出来ることを継続する。具体的にはインターンの採用による人員増、雇用前のスタッフ教育、と雇用創出、およびサービス拡大による発達障がい児に対する教育機会の増加と質の向上である。